このまち感じよう!
ここずたうん
大野南地区を楽しく育てる情報紙
発行：NPO法人 ここずっと　2022 March
No.21

ここひと インタビュー

2022.1.17 撮影

※寿（ことぶき）＝広島出身の女性ボーカリスト・ナビィと沖縄出身のギタリスト・ナーグシクヨシミツの二人組。

このまちには、市民による総合雑誌があります。『アゴラ』（agora：ギリシア語で「広場」の意味）がそれ。市内書店に並んでいるのを見かけて手に取った方もおいでではないでしょうか？　思わず、「これはな～に？」と。

市民による地域総合誌「アゴラ」は、季刊誌として 1997 年 4 月に創刊。東京新聞の元記者であった西尾顕爾さんがいなければ誕生しなかったし、2004 年2月に西尾さんが急逝された後を引き継いだ山田広美さん（中央区在住）がいなければ、今年 100 号を迎えることはなかったでしょう。

ぶれることのない姿勢をもって、立場や思想に垣根を設けず、まさに「広場」として「アゴラ」の編集を担当されている山田さんに、インタビューさせていただく機会を得ました。

市民の情報「広場＝アゴラ」の守り人・山田広美さん

現在、ほとんどおひとりで編集されていると存じますが、山田さんと「アゴラ」との出会いは？ ―――

私は、高齢の義父の世話をしていた普通の主婦で、PTA や子ども会の活動をしていました。向陽小学校の記念事業で、PTA として地域を知る冊子『小山に育つ』を作ることになったのが初めて取り組んだ本づくりなんです。それが西尾顕爾さんの目にとまり、その取り組みの紹介を依頼され、私が「アゴラ」に原稿を書くことになったのが始まりです。その後、私は現代詩の同人会に参加していたので、アゴラに掲載する詩を集めて提供する役割を頼まれました。そうするうちに、「取材に一緒に行かないか」と誘われるようになり、それがだんだん頻繁になっていき、ある日西尾さんは、「アゴラを継いで欲しい」という話をしてきました。当時私は 40 代になりたて、市民活動も何も全く知らず、何を言っているんだろう？という気持ちでしたが、編集委員のひとりなら、ということでいろいろ教えていただくことになりました。

西尾さんと出会う少し前から、「寿」※というグループのライブをメイプルホール（中央区千代田）で開催する活動をひとりでしていました。ポスターも自分で絵を描いて作っていて、それを見ていた西尾さんから、後に、絵本『戦車は止まった』の絵を描いてほしいと頼まれました。絵の勉強もしたことがないド素人ですよ。でも、描きました。もちろん、絵本づくりも初体験でした。

崖っぷちの編集長修行を経て

西尾さん急逝後、山田さんが継いでいく決意をされる経過、思いはどんなだったのでしょう？ ―――

西尾さんの背中を追って、あちこち取材に連れ回していただいているなかでも、市民活動家ではない主婦感覚の目線がフラットで良かったのかもしれません。初めての記事で麻布大学サークルのカラスの生態調査を書くとき、マウスすら満足に使えなかった私が PC を使おうと試み、知人に操作を一から教えてもらいました。それをきっかけに「アゴラ」は全ページ PC 編集になりました。

「アゴラ」の編集作業も変化が進んでいるさなかに西尾さんが急逝されました。編集委員会では、西尾さんとともに「アゴラ」を終えるという意見もありました。でも、そこで廃刊にするのは悔しかったし、西尾さんを二度葬ることに思えたんです。

引き継いだものの全く自信がなく、名刺に「編集長（修業中）」と肩書を書いて 2 年間ほど使いました。本当は、私、人見知りで人と会うとドキドキします。いつも崖っぷちに立たされている気持ちでした。自分がやらないと終わってしまう。泣いて投げ出したいと思ったこともあります。でも、やめたいとは思っても、やめようとは思いませんでした。結局、「アゴラをつくる」ことが好きなんです。

知ってほしいから、伝えたいから、諦めない

地域総合誌が成立する要件として、西尾さんの追悼座談会で、テーマ・企画力、様々な見識をもった地域市民の存在とその認知、そんな市民が発信してくれるか、受信できる市民がいるか、そのやりとりを見守ることができる地域風土があるか、と課題をあげ、何よりもそれを支える経営感覚があるかと問われていましたが ―――

西尾さんは、ネットワークづくりに長けた方でした。足を運んで取材するということを、いつも上機嫌でなされていました。西尾さんが遺してくださったネットワークや人脈から企画が転がり込んでくるというか。だんだん変化はしているのですが、基はそこで今も支えられています。経営感覚を問われると、西尾さんも私もありませんね。だから資金が続かなくなったら終りだと思ってます。

ただ、あくまで「広場」であることにこだわっています。興味のあることだけじゃなくて、自分に関係ないと思っていることでも知ってほしい、伝えたい。まさに「アゴラ」。簡単に諦めずにこだわっていきたいです。

この事在りしと伝えなば　深い恨みになお増して　深い契りの生まれなん

「アゴラ」30号掲載・西尾顕爾氏の新作能「平頂山」より（写真・「アゴラ」バックナンバー）

●季刊アゴラ　1 部 500 円　100 号は 2022 年 4 月 1 日発行予定（〒252-0213 相模原市中央区すすきの町 34-4 ☎090-7908-6978）

み〜つけタウン

■今号のテーマは、<ここ de シネマ 第 18 回>の上映作品『戦車闘争』にちなみ、「このまちの人と記憶」としました。「戦車闘争」から 50 年。相模原市民の 7,8 割の方がその後に誕生したり、転入されてきた方ではないでしょうか。当時を直に知る人たちは限られ、1972 年の「戦車闘争」だけでなく、「ベトナム戦争」をご存じなかったり、1973 年のキャンプ淵野辺の返還の記憶も薄れています。

■もちろん、反戦・基地問題は市民にとって大切な活動課題ではありますが、振り返れば、この地域には青空公民館活動につづく、このまちならではの市民活動の系譜があり、そこには、信頼を得て記憶を刻むキーパーソンが存在します。しかし、そうした方々は無名であるがゆえに、培われた流儀や思いを継ぐことなく、その記憶を時の経過に委ねてしまっている気もします。

■そこで、市民活動の系譜をたどり「このまちの人と記憶」の話題を集め、ここでずっと暮らしていくヒントを蓄えようと考えました。気づけば、きら星のごとく、いま、記憶に刻みなおしたい方々はいらして、このテーマは、今回だけでなくひきつづき追っていくものになりそうな予感がします。

このまちの ここの人たちの 記憶を ここでずっと♡

『戦車は止まった―1972 年相模原の 100 日』より絵のみ抜粋
文・にしおけんじ 絵・やまだひろみ アゴラさがみはら出版（在庫なし）2002 年

〝若さ、女性、市民感覚に未来を見る〟
「アゴラ」を遺してくれた人・西尾顕爾さん

サポセンまつりにて
西尾顕爾さん
（2003.10.26 撮影）

「アゴラ」創刊者の西尾顕爾さんは、毎号、小論を寄せていました。それは「議論よ起これ！」と題された「AGORA 西尾顕爾提言集」という冊子になっています。その中、2003 年夏号の提言は、「若さ、女性、市民感覚に未来を感じた」という文章で締めくくられています。西尾さんらしいぬくもりを感じないではいられない提言です。弱く力の無い者の可能性を信じているのが伝わってきます。記者修行をされている山田広美さんの姿から、そのことを実感されていたのかもしれないと想像します。その視点は、時代の先取りでもあり、混迷を続ける現在の世情においても、提言となっている気がします。

西尾さんの取材メモと原稿下書き▲
資料提供：相模原地方自治研究センター

暮らしの担い手が活動を拓く
消費者運動の先達・三宅みどりさん

みなさんは「相模原市南部地区消費者の会」をご存じでしょうか。1970 年に三宅みどりさんを中心に発足し、長年に渡って消費生活問題に取り組んできた団体です。　当時顕在化した食品添加物や合成洗剤などの課題に対し、「家族や子どもたちの命を守ろう」という主婦の素朴な思いが集まって立ち上がった会でした。

食品添加物の学習会、身近な店舗への安全な食品の販売協力依頼、石鹸や布巾の共同購入、相模原市消費者団体連絡会の立ち上げや行政への働きかけなど、その活動は多岐に渡り、紙パックの回収や食用油の廃油回収・再利用などは、現在の SDGs のまさに先駆けとも言える取組でした。

インターネットの時代になった今でも、多くの方々が、安全で安心して暮らせる生活を求めて悩んでいることを考えると、三宅さんの活動から、私たちはまだまだ多くのことを学ぶ必要があると思っています。　藤田雅之（元・相模台公民館職員）

みんなで手をつないで いいまちを つくってほしい――
市民をつなぐ ハブのような人・車輪の中心部 菅澤宜夫さん

菅澤宣夫さんとは、さがみはら市民会議の政策情報委員会で一緒でした。建築家である菅澤さんは、ただの市民が戦車を止める会、農業生産法人青空農園、市民フォーラムさがみはら、雑誌アゴラほか様々な市民運動に参加していました。いつも問題の本質に切り込み、次に何をなすべきかについて発言する人でした。その中で、私の思い出は「大晦日のモチ」です。青空農園は無農薬で作物を作っていますが、収穫したもち米で暮れにはモチをついていました。そこで出来上がった大きな鏡モチを毎年持ってきてくれました。夕方暗くなった時分に暗がりからぬっと現れて、「モチだよー」と言いながら届けてくれました。黒い顔が夕闇に紛れて見えにくいのですが、その中で目がキラリと光っていたことを今も思い出します。（西本敬）

会議などでお見掛けするだけだった菅澤さんとキチンとお会いすることになったのは、水俣からやってきた方に道案内を頼まれたからです。胎児性水俣病の患者支援のため、おもしろい農の試みがされているらしいので学びたい、ついては同じまちに住む私に連れて行って、と。水俣支援からお会いした菅澤さんは、とても朗らかに農を語っていました。建築家だと知ったのはずいぶん後のことで、稲穂に囲まれたお別れは、今も鮮やかに記憶が残っています。（「水俣」伝えるネット）

公正で公平であればこそできる全国初の市議の通信簿づくり
市議の通信簿をつけた人・赤倉昭男さん

1999年に「相模原市議会をよくする会」の設立とともに代表となった赤倉昭男さん。以後、20 年間にわたって、市議会をウオッチしつづけ、選挙時に立候補者の公開討論会を企画したり、具体的な議員の議会活動と市議会のあり方を、市民の立場で公正中立に観察して評価した「市議会議員の通信簿」を発表してきました。文字通り、市議会をよくするために市民としてできる積極的な働きかけを実践されました。ご自身を含むメンバーの高齢化に伴い2019年その活動を終えました。赤倉さんらしい、惜しまれるけれど、潔い締めくくりでありました。民主主義の発現とともの地方自治をみつめる眼差しは鋭く、〈ここ de シネマ第17回〉の映画『はりぼて』上映会では、トーク・ゲストとして、市議会のウォッチがいかに大切な活動かを伝えていただきました。今や、インターネットで傍聴するのも普通のこと。市民の眼で議会を良くする機会は拡がっていますっ！

赤倉さんのトーク出演のときは、打合せから、出演、資料準備、トーク後の対応まで、いっしょにさせていただきました。周りへのお誘い、来場者への丁寧なお礼の仕方までものすごく勉強になりました。やっぱり 活動はひとがあってこそ。ひとりひとりに丁寧に心ある対応できてこそ、活動の評価がいただけるのだと教えていただきました！

あのときの PTA の底力はすごかった…
場外馬券売り場誘致を断念させた市民
元・環境を考える会代表 佐藤眞理子さん

場外馬券売り場誘致を白紙撤回へと導いた 1 年 8 か月に及ぶ活動は、今からおよそ 30 年前の 1993 年の秋、相模大野駅前（現在ボーノのある場所）に場外馬券売り場（ウインズ）ができるかもしれないという噂を耳にしたことから始まりました。

そもそもウインズの何たるかも知らない PTA のお母さんたちだったので、先ずはそれを知ることからでした。知れば知るほど、私たちの知らないところで都市計画が行われ、そこに住んでいる人々の思いに関係無く決定されていく事への怒りと、女子大学のあるこの街にはふさわしくないという思いが強くなったのでした。

噂が真実となった時、誰か反対する人が出てきたら後に続けばいいとも思っていました。しかし、そういう人は現れず、このままでは都市計画決定が下りて何もしなければ駅前にウインズができてしまうという現実を前にして、私たちは立ち上がったのでした。12 月の市議会に署名を添えて陳情書を提出することになり、期限まで 1 週間あまりというのに 8000 名を超える署名が集まったのは驚きでした。

当初、「相模大野駅周辺の環境を考える会」は近隣小・中学校の父母が発起人という形で発足したのですが、反響が大きくなるにつれ会の性格を明確にする必要にせまられ、個人を代表とする市民の組織として設立しました。

この 1 年 8 か月の間に、全部で 23 回の機関紙「ストップ・ウインズ」の発行、毎週日曜日に伊勢丹正面玄関前のデッキで行われた街頭署名、総会と公開学習会、市議会の傍聴、各種団体へ出向　いての署名協力要請、他市のまちづくり研究会への参加、整備事務所との　面談、反対地権者との懇談、準備組合との懇談等と目まぐるしい毎日でしたが、主婦という立場で家事に手抜きはしないという強い思いもあり、2・3 時間の睡眠しかとれない日もありました。成功につながったのは、1 口 500 円で賛同人を募り資金を得られた事、市内在住の文化人の方々にも大いに助けられ、その協力によってできた絵葉書の販売も資金の助けとなりました。政治色の無い素人集団だったからこそ、多くの方々からの協力が得られたのではと思います。

振り返ると、あんなに忙しい毎日だったにもかかわらず悲壮感は微塵も無く、生き生きと楽しんでいた事と、いつも笑いが絶えなかった事で、延べ 12 万人を超える署名を集める事ができ、引いては場外馬券売り場誘致断念へと結びついていったと思えるのです。

◀西本さん（円内）には、ボランティアで　つちかった朗読力を発揮していただき、映像作品の音声ガイドづくりでもご援助をもらっています。

誰も孤立させない
ボランティアの地平を拓いた人・西本 敬さん

友人、知人もいないこの地に舞い降りて、横浜で、視覚障がい者への録音活動の講習を受け、私のボランティア活動が始まりました。

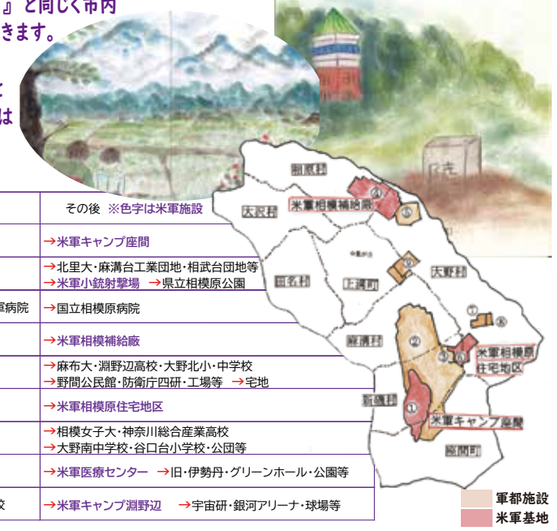
数年経って、市内の視覚障がい者や社会福祉協議会との出会いの中で、「地元で録音活動を！」との思いが仲間との会話の中でも出てくるようになり、1978 年、市内在住の横浜での活動仲間、地元のボランティア仲間とともに、「相模原市録音奉仕会ひばり」を結成し、新人養成の講座とともに活動を開始するようになりました。その後、1981 年の国際障害者年にはあじさい会館が設置され、同時に当時のボランティア団体の皆さんとともに「相模原ボランティア協会」を設立することになりました。

これらの新しいことへのチャレンジ、それは楽しいものでした。今、活動開始以来 50 年ほど経ってみて、私には、継続できたことへの感謝といくらか社会への貢献ができたことへの感慨がありますが、さらに「誰も孤立させない」ことを追求しつつ、新たな地平を切り拓いていきたいと思っています。

わたしたちが忘れかけている 軍都の記憶　西尾さんが遺したもうひとつの絵本

『星が丘の星は何の星　さがみはら ぐんと ものがたり」
文・にしおけんじ　絵・みむらみわこ
アゴラさがみはら出版 1000 円+税 1999 年

本書は『戦車は止まった」』と同じく市内図書館で手にとることができます。また、購入も可。右は、表紙と本書から絵と地図を転載。下記一覧表は本書 36 頁を基に作成。



《軍都から基地の町へ》

運出期	設置年月	名称	その後 ※色字は米軍施設
①	1937年9月	陸軍士官学校	→米軍キャンプ座間
②	1937年9月	陸軍練兵場	→北里大・麻溝台工業団地・相武台団地等 →米軍小銃射撃場　→県立相模原公園
③	1938年3月	臨時東京第三陸軍病院	→国立相模原病院
④	1938年8月	相模陸軍造兵廠	→米軍相模補給廠
⑤	1938年10月	陸軍兵器学校	→麻布大・淵野辺高校・大野北小・中学校 →野間公民館・防衛庁四研・工場等　→宅地
⑥	1939年1月	電信第一連隊	→米軍相模原住宅地区
⑦	1939年5月	陸軍通信学校	→相模女子大・神奈川総合産業高校 →大野南中学校・谷口台小学校・公団等
⑧	1940年3月	相模原陸軍病院	→米軍医療センター　→旧・伊勢丹・グリーンホール・公園等
⑨	1943年	陸軍機甲整備学校	→米軍キャンプ淵野辺　→宇宙研・銀河アリーナ・球場等

ここまち report

相模原市立博物館

陸軍施設⇒米軍基地⇒総合博物館

相模原市中央区高根 3-1-15
TEL:042-750-8030
FAX:042-750-8061
https://sagamiharacitymuseum.jp/

軍都から始まるまちの歴史を伝える博物館

開館10周年を記念して作成された博物館のシンボルマーク
まん中の切れ目は、相模原のイニシャルの「S」。
まわりの形は勾玉（まがたま）で、全体はプラネタリウムを表現。

米軍陸軍機甲整備学校はキャンプ淵野辺となり、その返還跡地に市立博物館ができました。同じ跡地立地のJAXA（ジャクサ・宇宙航空研究開発機構）に隣接し、施設としてプラネタリウムを抱えることもあり、もっぱら自然科学博物館と思われているのではないでしょうか。旧石器時代から昭和の生活に至るまでの人文分野の展示を相模川流域の地学的アプローチによる展示と勝手に解釈していたところ、「こちらは総合博物館ですから」と学芸員の木村弘樹さんに笑顔で説明していただき、「総合」の意味を改めて認識しました。ホームページをのぞくと、「地域の総合博物館」として、相模原の自然、文化並びに天文に親しみ、理解を深める場を提供することにより、郷土を愛する心をはぐくむこと、使命として、郷土の歴史や文化・自然に関する資料の収集・保存に努め、調査・研究して地域文化を継承し発信拠点となることをうたっています。

この深遠な課題のもと、分野別に学芸員の方がいて、木村さんは古代から現代に至る歴史分野の学芸員として企画・展示を担当しています。昨年は、公文書館と共催で相模原町誕生 80 年の特別企画として「軍都さがみはら展」を7月17日から8月5日まで（コロナ禍のため短縮）開催。このまちの記憶は博物館がとどめ、守り、語りついでいるのです。

2021年は〝軍都さがみはら〟が始まって80年
まちづくりのコンセプトは〝軍都〟だった

昨年から数えて80年前、1941年4月29日に2町6村が合併して、国内最大の面積を持つ相模原町は誕生しました。旧帝国陸軍の市ヶ谷からの移転受入れのためでした。（農地が陸軍用地として接収されたいきさつをまとめたのが、今号の3頁で紹介した絵本『星が丘の星は何の星』）軍都計画が立てられ、旧陸軍相模造兵廠（現・米軍相模総合補給廠）を核として、放射状に伸びる道路、国道16号と半分環状の道路整備は、現在もそのままです。同様に、水道事業も鉄道も住宅も礎は軍都計画にあります。陸軍士官学校への行幸のために造られた「行幸道路」の名称は、いまも市民に馴れ親しまれていますが、相模大野駅の旧名・通信学校駅、天皇から命名された相武台を駅名に入れた相武台前駅が士官学校前駅、相模線の相武台下駅が陸士前駅だったことは、記憶の彼方になってしまいました。しかし、陸軍関係施設が多かった相模原は、空襲被害をあまり受けていません。学芸員の木村さんは、米軍がすでにして戦後を見据えて施設流用を考えていたからではないか、とその理由を類推しています。

相模原町誕生 80 年企画展「軍都さがみはら展～国内最大の町誕生物語～」は、木村さんの解説つきの動画にまとめられ、現在、博物館ホームページをたどると youtube で視聴できます。博物館ならではの現代史の学びはいかがでしょうか。

▲動画内で解説する木村弘樹さんと下記は動画 URL

軍都さがみはら展解説動画 前編
https://youtu.be/gT7VHv-BXLA

軍都さがみはら展解説動画 後編
https://youtu.be/NRWIvHKXJtg

野間公民館（旧陸軍兵器学校）は講談社の創始者・野間氏が私設公民館とし、市民も利用していましたが、平成23年にこわされ、宅地となりました。一歩、屋内に入ると、圧倒的な雰囲気に気圧されたことが忘れられません。アゴラの西尾さんは軍都博物館の必要を説いていました。軍都遺産は平和遺産として常に記憶し直していかなくては――。

失われて知る野間公民館の記憶の深さ▶

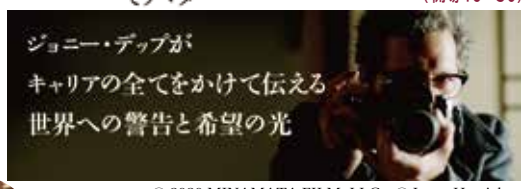
Information

ここ de シネマ第 19 回は 5月7日（土）開催

●映画上映とトーク

MINAMATA ―ミナマタ―

昼の部 13：00～ トーク 15：15～（開場12：30）
夜の部 17：00～ トーク 19：15～（開場16：30）



© 2020 MINAMATA FILM, LLC © Larry Horricks

参加費 1000円

トークゲスト●アイリーン・美緒子・スミスさん

会場との Q&A を中心に、環境を考えることから
希望につながるヒントにあふれたアフター・トークを！

関連企画

〈ここ de シネマ〉関連企画として開催されます（入場無料）

MINAMATA ―ミナマタ― と出会う・ミニ写真展

会場 大野南公民館（相模原市南区相模大野 5-31-1 相模原市南区合同庁舎内）
期間 4月28日～5月6日 ※5月6日 10：00 より上映会場ロビーに展示

第 19 回は、「水俣」を子どもたちに伝えるネットワークとの共催となります。1999 年から主に相模原市内小学校 5 年生を対象に 3 万人以上の子どもたちとともに「水俣」に学ぶ出前活動をつづけてきた伝えるネット。その所蔵展示品とともに、アイリーン・アーカイブより写真をお借りして写真展を開催。あなたが「水俣」と出会うお手伝いをさせていただきます。

●半券キャンペーン参加事業者募集中です！
●<ここ de シネマ>開催ボランティアも募集中です！

NPO法人ここずっとは
市民相談窓口を開いています。相談は☎042-745-0676へ。

『フリー情報紙 ここずたうん』 No.21
［発行日］2022年3月
［発行者］NPO法人 ここずっと
〒252-0303 相模大野9-6-18
ここずたうん編集室

ご意見、投稿、記者志望者は
ここずたうん編集室へ

【TEL】042-745-0676 【FAX】042-742-0447
【E-mail】info@cocozutto.jp

※ここずたうんはまちづくりを考える【NPO 法人ここずっと】が発行しています。